

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	児童発達支援施設 たいよう		
○保護者評価実施期間	7年 2月 10日		7年 2月 28日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	10	(回答者数) 6
○従業者評価実施期間	7年 2月 10日		7年 2月 28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数) 6
○事業者向け自己評価表作成日	7年 3月 24日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	職員が明るいと同時に、事業所内が広い事により、日々活動を充実させ様々な体験・経験をさせている。また、集団支援では社会性や協調性を育むプログラムを実施している。	初回のアセスメント時には、保護者とじっくり話し合うことにより、特性や家庭での様子を詳しく把握できるよう努めている。	感覚統合やSSTなど、子どもの発達に応じたプログラムを充実させていくと共に、視覚的に分かりやすい支援を胎教していく。
2	保護者との面談や連絡帳を通しての日々の情報共有を図っている。	子どもが興味を持ちやすい遊びを通じて、認知・社会性などの発達を促せるよう努めている。また、遊びの中で『できた』という成功体験や喜びを積み重ね、自信を育んでいけるようにしている。	外部の専門家と連携を図り、専門的なアドバイスを受けられる環境を調える。また、保護者参加型のイベントを増やし家庭との連携強化に取り組む。
3	遊びを通じた学びの場を提供し、児童が楽しく成長できる環境を整えている。	連絡帳や面談を通じて、保護者が子供の成長を実感できるようサポートを行っていると同時に、安心して相談できるよう日頃からのコミュニケーションや、情報共有を行っている。	地域のイベントや交流会に積極的に参加し、児童が社会と関わる機会を増やす事ができるよう取り組む。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	提供している支援がワンパターン化してきており、児童が飽きてきたり、マンネリ化となっており、新しい発達支援の知識や技術を十分に取り入れることができなくなっている。	有資格者の確保が困難である。	支援プログラムの充実として、音楽療法や運動療育などのプログラムを導入する。 児童が楽しく楽しめるようにタブレット教材、アプリなどを活用。
2	地域や関係機関との連携が不十分である。	保護者が事業所での支援内容を十分に理解できていない。保護者の中には、発達支援に対して受け身な方もいる。	保護者同士の交流の場を作るために、座談会や親子イベントを開催していき、保護者の状況に合わせ、参加しやすい時間帯や形式を工夫していく。
3	施設環境の整備	交流の場が少なく、悩みを共有しにくい環境。 スタッフのスキルにばらつきがあり、支援の質が一定ではない。	福祉ネットワークの活用 SNSやホームページを活用し、事業所の取り組みを発信